〈書籍紹介〉

義経と菅江真澄、「北」を目指した人々

―菊池勇夫『義経伝説の近世的展開―その批判的検討』『探究の人 菅江真澄』―

深澤昌夫

本学一般教育部教授菊池勇夫氏（日本近世史）がわずか半年の間に著書を二冊も刊行された。『義経伝説の近世的展開―その批判的検討』サッポロ堂書店（二〇一六）と『探究の人 菅江真澄』無明舎出版（二〇一七）である。青森出身の菊池氏は一貫して東北地方、より正確には北東北から北海道までを視野に入れた北方史の研究に精力的に取り組んでこられた。それはたんに北方の地域史、生活文化史というにとどまらず、中央（の歴史）に対する地方からの発信、問いかけ、問い直しという志に貫かれており、このたびの二書もあえて北海道のサッポロ堂や秋田の無明舎から刊行されている。

『義経伝説の近世的展開―その批判的検討』は全五章からなる。まず、目次を紹介しておこう。

第一章　義経蝦夷渡り（北行）伝説の生成―民衆・地方が作り出したのか

補論1　蔓延する「義経北行伝説」―伝説をいかに解体するか

第二章　『通俗義経蝦夷軍談』の歴史舞台と蝦夷知識

付表　菅江真澄の義経伝説一覧

史料　『義経蝦夷渡記』翻刻

第三章　義経蝦夷渡り伝説の地方的展開―三厩の観世音縁起をめぐって

補論2　義経の「粟の借用証文」

第四章　地誌考証と偽書批判

第五章　松浦武四郎と義経蝦夷渡り伝説

付表　松浦武四郎が記述した松前・蝦夷地の義経伝説一覧

我々文学の側にいる人間にとって、源義経という人物は『平家物語』に名高い歴史上の武将であると同時に、その一代記はより創作性・伝承性・伝奇性の強い『義経記』にまとめられ、あるいは能や御伽草子において「判官もの」というジャンルが形成されるようになり、さらには奥州を目指して旅する御曹司義経と浄瑠璃姫との恋物語から「浄瑠璃」という新興芸能が生まれ、これが後に人形と結びついて現在の文楽につながっていくという意味で、文学史および芸能史上きわめて重要なキャラクターであり、かつ史上まれに見る息の長いキャラクター

であるということができる。それだけに文学・歴史学はもちろんのこと様々な分野から義経関係の書物が多く刊行されている。ふと見上げれば、自分の研究室にも、渡辺保『源義経』吉川弘文館（一九六六）、高橋富雄『義経伝説―歴史の虚実』中公新書（一九六六）、桜間金記『能と義経』光芒社（二〇〇〇）、鈴木健一『義経伝説―判官びいき集大成』小学館（二〇〇四）、河北新報出版センター・京都新聞出版センター編『京から奥州へ―義経伝説をゆく』河北新報出版センター（二〇〇四）、五味文彦『源義経』岩波新書（二〇〇四）、別冊歴史読本『源義経の謎』中経出版（二〇〇五）、森村宗冬『義経伝説と日本人』平凡社新書（二〇〇五）、大三輪・関・福田編『義経とその時代』山川出版社（二〇〇五）、文化地層研究会編『源義経 夢の跡 探求地図』（二〇〇五）、伊藤孝博『義経北行伝説の旅』無明舎出版（二〇〇五）、金沢英之『義経の冒険―英雄と異界をめぐる物語の文化史』講談社選書メチエ（二〇一二）等々、義経関連の書籍がずらりと並んでいる。こうしてみると、一九六六年のＮＨＫ大河ドラマ『源義経』（主演は当時二三歳の尾上菊之助／当代菊五郎）や二〇〇五年の『義経』（主演は当時二二歳の滝沢秀明）にあやかった出版物も少なくないことが分かる。…が、それはさておき、義経である。

もともと『平家物語』において「色白で出っ歯の小男」と評されていた義経は、いわゆる「判官びいき」の心性を背景に、後世悲劇の英雄あるいはさまよえる貴種としてその姿かたちも美化・理想化されていくのだが、文学や芸能の世界ではこうした史実離れはよくあることで、義経もしまいには衣川で自害せず、北方・蝦夷地に逃れ、果ては大陸に渡ってジンギスカンになった、などという荒唐無稽な物語も作られていった。そういえば長山靖生の『偽史冒険世界―カルト本の百年』筑摩書房（一九九六）で真っ先に取り上げられていた「トンデモ本」も小谷部全一郎の義経ジンギスカン説であった。

日本文学は伝統的にオリジナル（原典）を尊重しつつ、必ずしも原典にとらわれず、かなり自由奔放な二次創作、三次創作を許容するところがあるが、義経はその最たるものと言っていいだろう。我々文学サイドの人間にはそこがまたおもしろいところではあるのだが、これが近代以降も反復・増幅され、あたかも事実・真実であるかのごとく流布していくとなると話はちょっと違ってくる。たとえば大河ドラマなどで義経が取り上げられると、そのたびに義経関係の伝説や伝承が―それらが伝説・伝承であるからこそ事実の裏付けを欠いたまま、あたかも「隠された真の歴史」であるかのように―さかんに喧伝され、地域・自治体・鉄道会社・旅行会社・広告代理店等々、関連業界諸手を挙げて大々的なデスティネーショ

ンキャンペーンが繰り広げられる。むろんそれを歴史的な事実と混同するほど現代人はナイーブではないだろうし、義経の北行渡海・生存説など、大方はそれこそありえたかもしれない、あるいはそうであったらおもしろい、こうあってほしいというような架空の歴史ロマン、いわゆる歴史の「if」として受けとめているのではないか…とも思うけれど、菊池氏はこうした「伝説の垂れ流し」ともいえる現状に対し、実証性を重んじる歴史学の立場から批判を加え、こうした伝説が成立・流布し、あるいは義経関係の遺物・遺跡なるものまで「発見」されていく過程やその政治的な意図を明らかにしていく。

氏によれば、一七世紀から一八世紀前半にかけての蝦夷地で語られていた義経伝説は室町時代の『御曹司島渡』系統の物語であって、これが「義経は衣川で死なず蝦夷地に逃げ延びた」とする蝦夷渡り伝説に昇華発展していく契機は寛文九年（一六六九）のシャクシャインの戦いであったという（第一章、二一頁）。

東北民衆の義経に寄せる深い愛着のようなものが義経不死伝説を生成させたと考えるのはおそらく間違っている。そうではなく、義経蝦夷渡り伝説は幕藩制国家の華夷秩序システムにきわめて都合のよい物語であったからこそ広まったものであり、その意味では体制迎合的な物語であることを本質としていたといってよい。（第一章、二三頁）

（引用者注―義経）北行伝説は江戸時代中期に生成し、その後の日本史の展開のなかで政治的な色彩を強く帯びた伝説として自己展開し発展を遂げてきた物語である。良くも悪しくも日本人のある人々の精神文化の営みが作り出し、積み重ねてきた物語である。その意味では北行伝説は近世史および近現代史の分野が扱うべき問題である。文学的領域の説話研究にせばめないでひろく精神史ないし思想史の重要な一環をなすものとして捉え、伝説（物語）を通して何がどのように語られてきたのか、当然作者の作為性・意図がからんでいることであるが、時代状況との相互関連のなかで精細に解き明かしていくことが必要である。（第一章補論、五七～五八頁）

一見、夢物語のような他愛のないロマン、あるいは非現実的な伝説・物語であっても、それがたんなる一個人の夢想でなく、ある時代・社会で共有されるもの、いわば事実らしきものになっていったとすれば、そこには個人（作者）の思惑を超えた力が働いている。伝説・伝承なるものも「昔からそう語り伝えられている」という「昔」がいったいいつなのか、いったい誰が語り始めたのか、何のためにそのように語る（騙る）のか、といったことは歴史学のみならず、文学の側にいる我々にして

も（ただたんに伝説をおもしろがるだけではなく）問うべき課題であろう。

ちなみに、義経と似たような伝説・言伝えとしては、琉球の為朝伝説や九州の安徳天皇生存説があり、その土地では一種の「事実」（それを信じる人々にとっての「事実」）として語り伝えられている。一方、これはまったくの作りごとだが、延享四年（一七四七）初演の『義経千本桜』などは壇ノ浦（作中では屋島）で死んだはずの人々が、実は生きていた、生き延びていた、というサプライズから始まる。作中、平知盛は町人に身をやつし、義経にリベンジを挑み、再び破れ、海の底に沈んでいく（二段目、大物浦＝海）。あるいは平教経は僧兵に身をやつし義経に挑もうとするが、彼を兄の敵と狙う佐藤忠信に討たれる（五段目、吉野山＝山）。一方、平維盛とその妻子（清盛の嫡流である六代）そして安徳天皇は、名を変え姿を変えて、生き延びることになる。歌舞伎や浄瑠璃など芝居の世界では、一般によく知られた物語＝「世界」に対し、オリジナルな「趣向」を組み合わせて芝居を仕組むならわしがある。奇談・珍談へのニーズはいつの時代にもあって、一口に「物語（文学）と歴史」「虚構（想像力）と事実」と言っても、両者の関係は必ずしも一筋縄ではいかず、相互に奇妙な共犯関係を結ぶケースもある。もともと嘘・偽り・うわさ・でっちあげの類であっても、それを誰かが語り伝え、説き広め、広範に拡大・拡散させてしまえば、そう簡単に覆すことのできない「事実」として扱われてしまう場合もある。それが「語り」のおもしろいところでもあり、またおそろしいところでもある（ネット時代の現代はなおさらである）。我々に必要なことは、人のいうことを鵜呑みにすることではなく、また主体的な判断を留保したままあやしげな説の流布に加担することでもなく（それは結局虚妄の説の成長拡大・拡散に資することになる）、氏の指摘するように、その背後にある、人と意図と時代状況を批判的に検証することであろう。氏の『義経伝説の近世的展開―その批判的検討』はそのサブタイトルが示す通り、いわゆる義経伝説に対して歴史学的な批判・検討を加えたものだが、文学の側にいる我々も大いに学ぶべき書としてここに紹介しておきたい。

が、それにしても、本書刊行の二〇一六年現在、あいかわらず義経生存説を声高に唱える書が刊行されていることには正直驚きを禁じ得ない。幾度となく学問的に否定され、抹殺され、トンデモ本扱いされても、不死鳥のように、あるいは雑草のようによみがえる「義経は衣川で死んでない」説。義経それじたいよりも義経伝説（幻想あるいは妄想）を生み出す想像力のたくましさに驚嘆せざるをえない。たしかに菊池氏も本書の中で指摘して

いるごとく、北東北から北海道にかけて義経がらみの伝承を残している土地をつないでいくとあたかも一本のルート（まるで義経の逃走経路）のようになる。このことをどう考えればよいか、いったいどういう事情でこういったルート（らしきもの）が出来上がったのか、興味は尽きないところではあるが、それが伝説であると承知の上で各地を旅して歩く「ロマンあふれる歴史紀行」というならまだしも、いわく「正史の虚構を覆す」とか「これが正しい歴史だとは誰も言えない」とか、言えばいえる、何でもありの世界であり、こうなってくると、たんなる「判官びいき」というよりは、むしろ「判官びいき」を含むこうした言説の根底に、（世の中において）支配的なもの、権力的なもの、「正しい」とされているもの…に対する「ルサンチマン」（抑圧され虐げられている者の恨み、怨恨、復讐、自己正当化）の水脈が滔々と流れている、と見るべきではなかろうか。だとすれば、「悲劇のヒーロー」「不遇なヒーロー」義経はいつの時代もそうした人々の、そうした心性の、格好のはけ口になってきたし、今後もあり続けるだろう。そして、おそらくここが文学と歴史の分かれ道になるのだろうと思うが、佐々木幸綱氏などが言われるように、歴史（いわゆる「正史」）が勝者のものであるならば、文学や芸能は敗者や弱者の側にある、ということができるのではなかろうか。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

菊池氏の新刊、もう一冊は菅江真澄に関する本である。菅江真澄は江戸時代後期の人。三河の生まれで、東北地方を旅し、歌を詠み、絵を描き、土地の人々と親しく交わり、藩命により地誌を作成し、数多くの日記・随筆を書き綴り、故郷に戻ることなく秋田で没した。菊池氏にはすでに吉川弘文館の人物叢書『菅江真澄』（二〇〇七）があり、同書については筆者も本誌四三号（二〇〇八）で紹介したことがある。このたびの新刊『探究の人 菅江真澄』はより一般読者向けにムック本のような体裁となっていて、真澄のことをよく知らない人たちにもその人となりや著作の魅力、菅江真澄という人物の「類まれな個性・感性」が伝わるように工夫されている。

本書は全九章からなる。以下、目次を紹介しておこう。

第一章　菅江真澄の魅力は何か
第二章　「蝦夷」への憧れ―松前渡海まで
第三章　「いにしへ」探究の真澄の旅・学
第四章　クニコトバの生活世界
第五章　真澄の「ひがおもひ」―金花咲く「みちのく山」探索
第六章　「絵引」をする菅江真澄

第七章　日記から地誌へ―日記体地誌の位置づけ
第八章　真澄の地誌と『群邑記』―消えた村への関心
第九章　菅江真澄の著作と学問

菅江真澄はその故郷や生い立ち、家族のことなど、プライベートに関わる部分は本人があまり語っていないためよくわかっていない。が、氏は本人が語りたがらなかったことを「あれこれ詮索し、暴いてみせることにはあまり興味を覚えない。作品世界の魅力や可能性をもっと引き出し、語っていかなくてはならない」と述べ（第一章、一一頁）、さまざまな角度から真澄の人となりや「学文」、そして真澄が書き記した北東北の世界に迫っていく。

江戸時代、真澄と同じように歌枕行脚を志した故人・先人・文人たちは多い。松尾芭蕉などは晩年、それこそ「道祖神の招き」（という名の旅心）にとりつかれ、「日々旅にして旅を栖（すみか）」（『奥の細道』）とする人となったが、真澄と芭蕉が違うのは、真澄が「いったん落ち着けば二年でも三年でもそこに根拠を置きながら、地域を歩き回る」人だったということである（第一章、一〇頁）。それでいて真澄は、どこかに住みついてその土地の人になるわけでもなく、また思い立って旅に出る。「出会いと別れ（旅立ち）の繰り返し、それが真澄の人生であった」（第一章、一〇頁）。そういう意味では、彼はついに旅人で、よそ者だった。だが、決して孤高でも、孤独でもなかった。一部には彼を「初めから孤独な漂泊者として生きるより他なかった」「さまざまの迫害に耐えて生きた」などと評する向きもあるが（『日本古典読本』筑摩書房・解説、二〇八頁）、若干言い過ぎの感、なきにしもあらず、と思われる。もしそうなら、こうまでその土地の暮らしぶり―とりわけ地震、津波、水害、冷害、けかち（飢饉）などに耐え、苦しみ、涙する土地の人々の困窮のさま―を子細に聞き取り、書きとめることはできなかったであろう。菊池氏が言われる通り、真澄は「人々の嘆き悲しみに寄り添う」人であり（第一章、一四頁）、人々もまたそういう真澄を信用し、信頼し、自らの体験を語って聞かせたのであろうと思われる。

真澄はあるがままに物事を観察し記録したといわれてきた。正月の年中行事などの詳しい記述をみるとそのことに納得させられる。冷静沈着な性格のようにみえるが、ずいぶんと涙もろく、泣いた人だったのではないかと思う。作品の修辞的な決まりのパターンだとは必ずしも見倣せないのではないか。真澄は本質的にそのような人だったし、それが真澄の作品全体に貫（ママ）く特徴となっており、真澄に共感をもつ人が多い理由なのではないかと思う。（第一章、

一六頁）

名もない生活者の声なき声に耳を傾け、これを子細に記録してきた菅江真澄は「民俗学の先駆」として位置付けられている。そうした「評価はそれほど間違っているとは思わないが、そう規定してしまうことによって、たとえば生涯歌人として生きたこと、あるいは晩年の文献考証家といった別な側面などがみえなくなってしまう恐れがある」（第九章、一二八頁）。そもそも真澄を北へ北へと突き動かしていたのは「歌人としての古歌・歌枕への憧憬」であった（第二章、三一頁）。

真澄は歌の向こう側に「いにしへ」を見ていた。真澄にはすでに失われた「いにしへ」に対するつよい憧れや思いがあった（第三章、三五頁）。真澄の場合、歌を理解するということは、たんに言葉（古語）の意味を知る、探究するというにとどまらず、実際にその土地（名所・旧跡・歌枕等）に赴き、その土地の「ふり」（風俗や言語・習慣、生活文化等「その土地の暮らしぶり」）を実見・実感することによって得られるものだった。そして、彼にとって懐かしく慕わしい「いにしへ」は、一見みやびとは程遠い、蝦夷地を含む遠隔地にこそ多く残っているという逆説があった（たとえば方言＝クニコトバのなかに宿る「いにしへ」）。したがって、真澄の「いにしへ」発見・探究の旅は奥羽や蝦夷地に暮らす人々の言葉や習俗・習慣、史跡・旧跡、あるいはその土地土地で出土した考古遺物や言伝えなどのなかに「いにしへぶり」「いにしへのてぶり」を発見・探究する旅でもあり、彼の関心は自然と「歌から風俗へ」という展開をたどった（第二章、三三頁）。真澄の旅と探究は「古歌」から「その土地の人々の暮し・生活」へ、そしてかの地で連綿と受け継がれてきた「人々の暮し・生活」から諸文献に記された遥かなる「いにしへ」へとつながっていき、またそれによって蝦夷地や東北地方の暮らしと文化が実は「決して断絶していない、連続性において認識されることになった」（第三章、四三頁）。であればこそ、真澄には江戸からも京からも遠く離れた東北や蝦夷の人々（アイヌ）を見下すような態度はまったくない。というか、あろうはずがない。真澄はその点、宣長など「日本文化の規範性によって華と夷（未開と文明）の別を論断していく多くの学者的態度と違っていた」（第三章、三四頁）。そういった意味でも、菅江真澄という人はまことに「稀有な人」（第一章、一〇頁）であった。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

以上二冊、たいへん粗雑な要約で申し訳ないが、菊池勇夫氏の近刊を紹介してきた。菊池氏は著書の中で年を

とっても衰えを知らぬ真澄の旺盛な執筆力と健脚ぶりに驚嘆されているが、御自身もまた非常に精力的に研究に取り組んでおられる。私も氏の業績に触れるたびに触発されるものがある。そして、私もいずれ何とかしなければならないという気持ちになる。何を？　実は、実家で手つかずのままになっている曽祖父の遺品がずっと気になっているのである。私事で恐縮だが、曽祖父の名は深澤多市。秋田関係の歴史史料を蒐集・翻刻し、『秋田叢書』全十二巻（昭和三～一〇年）および秋田叢書別集『菅江真澄集』全六巻（昭和五～八年）を刊行した人である。多市が蒐集した本当に貴重な書物・古文書の類は大正時代に自宅が火事に遭い五千冊余りが焼けてしまったというし（実家には焼け焦げた日露戦争従軍記章が残っている。多市はこのときの火災がきっかけで『秋田叢書』等貴重史料の公刊を決意したという）、曾祖母いわく、多市の死後、何者かがトラックで乗り付けて曾祖母にいくばくかの金を渡し、多市が残した資料をごっそり運び去ってしまったという。だから、いま実家に残っているものは大したものではない。ほとんど見る価値のないガラクタのようなものであろう。とは思うけれど、それでもこまごまと、それなりに残っているのである。ちょっと見ただけでも毛筆に巻紙の書簡の束であったり（それも宛名が「秋田県／横手市／深澤多市」だけで届いているというのも時代を感じさせる。あるいはまだよく確認していないが、当時交流のあった柳田國男の書簡なども残っているかもしれない）、土器等の考古資料であったり、あるいは大正時代のポスターやマッチのコレクション等々、一部は以前秋田県立博物館に貸出したことがあるけれど、大半はそのままになっている。歴史関係は私の専門外で、正直これらを扱う時間も能力も私にはない。しかし、そろそろ何とかしなければならない、と考えている。

　それはそうとして、今回の菊池氏の二冊は義経に関心をもつ人たちや私たちの祖先である近世東北地方の庶民の暮しや言葉（方言）に関心をもつ人たちなどに、ぜひ一読を奨めたい。私も菊池氏のお仕事に導かれ、義経に思いをはせ、真澄に心を寄せつつ、こうした人々の事跡・業績を後世に伝えるために精魂を傾けたあまたの人々の想いも受けとめていかなければならないと思う。末筆ながら、菊池氏の学恩に感謝し、ますますの御健筆をお祈りする次第である。

（了）